

---

# 花開くとき

鈴蘭

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

花開くとき

### 【Nコード】

N2121Z

### 【作者名】

鈴蘭

### 【あらすじ】

彼と両思いだと思ってた…

でも…通り魔事件によって変わった。

彼の心はどこ？私の心はどこ？

私の心は…花。

でも…花は散ってしまった…

## 第一章

花…それははかないもの…。

散ってしまえば、その花は終わってしまう。

そう、恋も同じ。

恋という花が散った時、失恋という悲しさが、私たちを襲う…

花開くとき

私の名前は宮野志保。

科学免許、医者免許を持っている、天才博士と言われている私。そんなの、ただの空論にしか過ぎない。

まあ、免許を持っているのは本当。

でも、天才なんて…この世にいない…と思う。

最近、「と思う」が多くなってきた。

しかも、天才だとか、すごいとか…。

そう、私から見て、天才、すごいが当てはまっている人がいる。

ただの憧れじゃない。

私の好きな人なのだ。

彼は、私をいつもいつも助けてくれた。

私が灰原哀だったとき、私を守ってくれた。

いつもいつも守られていた私。

だから、彼にひかれていった。

どうして？

どうして私を守るの？

期待させるようなこと…しないでほしい。

私はあなたを愛してしまった。

罪なことをしてしまった。

でも、これは、チャンスかもしれない。

もし、あなたが私のことを愛しているなら、

私と両想いならば、私は幸せになる。

だって…そうでしょう？

好きでもない奴を守る？

好きでもない奴を助ける？

私だったらそんなことしない。

でも…私は本当に罪びとである。

彼をずっと待ち続けていた、蘭さんから取ってしまふこと。

きっと私と彼は両思い。  
でも…蘭さんの幸せはどこ？  
蘭さんはずっと暗闇にいることになる。  
彼という希望を私がとってしまったら…。

あほらしい。

そんななの、蘭さんは強いから平気よ。

彼がいなくなつて、彼女はきっといい人を見つ<sup>彼氏</sup>ける。

そうでしょう？蘭さん。

「新一い！」

あら、蘭さん。

私の彼氏に手を出すなんて…。

「なんだあゝ蘭!!！」

あらら、どうしてこたえるのよ！

「今日、買い物に付き合ってくれる？」

「ああ、いいぜ！」

「よかつたあ！最近通り魔が多いからさ…！」

「ああ…蘭、気をつけるよ？その犯人、そつと目的ターゲットに忍び寄り、気付かれぬままナイフを女性の腹を突き刺すんだってさ。」

「しかも、女性ばかり。いやだなあ…！」

どうして？

どうして蘭さんの心配ばかり…

私の好きな人、それは工藤新一。

名探偵の工藤新一。

優しい工藤新一。

私のもの…。

彼は…私のもの。

「志保さん！」

「あら、蘭さん。」

「今日、買い物行かない？」

「行かない？って…あなた知ってるでしょ？通り魔のこと。私はそんな危険なこと…」

ちよつと待つて。

もし狙われるとすると、きっと工藤君が助けてくれるはず…！

「いいえ、行くわ！あなたが狙われたらいけないものね！」

調子よく言った私。

うふふ…

「じゃあ、放課後…！」

蘭さんの声とともに、チャイムが鳴る。

授業中はいつも寝ている彼。

私も眠い…。

あ…もう限界…。

「…ちゃん…?」

え…？  
誰…？

「…ほさん！？？」

誰よ…

「……ほさん！？」

誰なのよ……あなた……！！

いやあああ……！！

「志保さん！……！」

ハッと我に帰った時、私は放課後の教室にいた。教室にいるのは私と、蘭さんと……工藤君だった。

私を待つてくれたのね……。

「蘭さん、行きましょう？」

蘭さんの手を引くとともに、工藤君に視線を向ける。

あ、こつちを見てる……。

いいえ……あれは私に見ているんじゃない……！！

蘭さんを見ていた・・・。

優しい、穏やかな笑顔で…

## 第二章

「蘭！蘭っ！！！！蘭っ！！！！」

「ら・・・ん・・・さん・・・」

ピーポーピーポー

「お前を逮捕する！！」

男女の大声が道路に血まみれで横たわっている女子に呼びかけている。

その女子は帝丹高校二年、毛利蘭だった。

呼びかけている女は驚きで何も言えない・・・。

男は一生懸命汗を流すまで大きな声で呼びかけた。

「誰か、付き添ってくれる人はいませんか！？」

救急車の人々が人々に呼びかけている。

蘭を救急車に乗せた。

「俺、行きます！」

「わかりました、では、乗ってください。」

新一は素早く乗ると、研究者、医者、宮野志保は救急車が発するのを見届けた。

なぜ…

蘭がこうなってしまったのか…

それは、今から32分15秒前…

ここから、志保目線で説明します…。

「えーと…これと…これと…」

蘭さんが傷のなさそうな野菜を一生懸命選んでいる。  
どうやら今夜はカレーらしい。  
しかも、三人分取っている…。

蘭さんと、蘭さんのお父さんということとはわかるけど…  
あともう一人は誰かしら？

「新一、サラダ食べる？」

さつきから蘭さんは工藤君に質問。

私はそんな景色を見て、こう推理した。

あともう一人は…

工藤君だと…。

工藤君は嬉しそうに答えている。

きつとそう。

私という人がいるのに…。



私が悲鳴を上げた・・・  
目をつぶって痛みを感じ・・・

てない・・・？

今・・・ナイフが突き刺さった音がしたはず・・・！！

「ヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤッ」

犯人だって・・・笑ってるじゃない・・・！！  
私・・・死んでるの？

そつとそつと目を開けた・・・。

そこにいるのは・・・黒髪で私が憎んでいた・・・

蘭さんだった・・・。

「ラ、蘭さん…!？」

「だい・・・じょうぶ？けが…ない？」

そ、そんなことより…あなたのほうが…っ!!

蘭さんのおなかから大量に血が出ていた。

「だいじょうぶ…警察…呼んだから…」

「救急車、呼んでくるわ！」

私はその場から逃げたかった。

私のせいにされる…

工藤君に文句言われる…

私に戻つてくると工藤君が蘭を抱き上げていた。

哀しそうな、憎しみのこもった顔で私を睨みつける・・・。

「く、工藤君・・・？」

「宮野…救急車は？」

「あ、あと1分ぐらいで…」

「そうか…っ蘭っ！！！！しっかりしろよ！蘭！！！！」  
さっきより血が…たくさん出てる…！！

「ら…ん…さん…」

どうにもならなかった。

どうにも…

救急車がくると、蘭さんはタンカに乗せられ、工藤君は付き添っていった。

私はただ…見守るしかなかった。

哀しい顔をしていことは…私にもわかった。

そのご、蘭さんを襲った通り魔は無事、逮捕された。

「蘭さん…」

そっと呟いた時、私の目から涙が出てきた…。

その時、どこからか、声が聞こえてきた。

「あのひとよ、あの人。さっきのかわいい子がかばったのよ…！！お礼も言わないで…っもしかしたら、さっきのかわいい子をたてにし

たんじゃない!？」

「最低！」

「本当よね!？」

違うのに…蘭さんが勝手に…

でも…お礼も何も言っていない…。

蘭さん…っ

蘭さん…っ

ゴメンナサイ…。

そして…

ありがとう…

私は急いで米花総合病院に向かった…

## 第二章（後書き）

蘭…どうなるの!？

### 第三章（前書き）

蘭目線です！

### 第三章

私…どこにいるんだろう…？

真っ暗な世界…

暗黒な世界…

そんな感じがする。

真っ暗で何も見えない…！

怖い…いや…

私…何があつたんだろう？

確か…確か…

私…志保さんをかばって…かばって…

そう…通り魔に刺されちゃったんだ…

ちよつど買い物が終わつたから公園に行ったら、志保さんが襲われ  
そうになっていたから…なぜか、体が動いていた。

そのあとのことは覚えていない…。

かすかに新一の声が聞こえた。

一生懸命私を呼んでくれた。それだけでうれしかった…新一が私を  
呼んでくれているだけでうれしいよ…。

もし…私が死んじゃったら…志保さんと幸せになってね…新一…。  
そう、知ってた…志保さんは新一のことが好きだって。

きつと新一も志保さんが好き。

でも・・・私は新一がずっと好きだった・・・。

その時、志保さんが通り魔に襲われそうになっていた・・・。

志保さんが死んでしまったら、新一の幸せはどこへ行くの？

そう思ったとたん、私は志保さんを庇っていた。新一の幸せのため、

志保さんの幸せのため、そして、私の幸せのため。

新一が幸せなら・・・私も十分に幸せです・・・。

新  
—  
∴

ハッ・・・

聞こえた…蘭の声が聞こえた…！

俺は、蘭を助けてやることができなかった。

蘭と幼馴染の俺が…

蘭を昔から愛している俺は…守ることができなかった。

蘭を守ることができなかった。

まさにスローモーションだった。

でも、そのスローモーションに俺はついていくことができなかった。

蘭は命を張って宮野を守った。

俺は…そんなことできなかった。

どうしてだ？

探偵であるこの俺が…一人の女の子に負けるなんて…

そんなのどうでもいい！  
とにかく…蘭が助かるまで…  
俺は…戦い続ける…！

志保さんと幸せになってね…

え…？

蘭…？

何言ってるんだよ…！俺は…蘭が好きなんだぞ？！

蘭…！！

まさか…

俺は急いで蘭のいる病室へ向かった。

「蘭！蘭！！」

一生懸命呼びかける。

付添いの宮野が驚いたような顔をしている。

「工藤君！何を……！」

「蘭！！蘭っ！！！！」

「工藤君！」

宮野の声なんか俺の耳には届いていなかった。

それよりも、蘭の言葉が聞きたくて……蘭の瞳が見たくて……たまらなかつた。

あ……動いた……

蘭の指がかすかに動いたのが、おれも、宮野も分かった。

「蘭！？蘭！！！」

「……」

蘭の瞳がかすかに見えた…。  
きれいなすんだ瞳が俺に見えた…。  
きれいに丸く開いた瞳は…どこかわからないようなどこか、遠くを  
見ているような目だった。

「宮野！先生を呼んで来い！」

「ええ！！！」

宮野が走っていく。

「蘭！目が覚めたんだな！」

「……」

「蘭…？どうかしたか…？」

蘭の返事がない…。

蘭の返事が…ない…

どうかしたのか？

蘭…？

「あなたは誰…？私は…蘭っていつんですか…？」

### 第三章（後書き）

蘭！？どうかしたのかあああ！！？

ってオーバーな私です…！

感想待ってます！

## 第四章

「あなたは誰…？私は…蘭っていうんですか…？」

衝撃の言葉が、工藤君に襲いかかる。

私がそれを聞いたのが、先生を病室に急いで連れてきて、ドアを開けた瞬間だった。

「ら…ん？」

工藤君はもう失神寸前のような目で蘭さんを見つめていた。

「あの…だから…！私は…？」

蘭さんは…

記憶喪失になっていた…

なぜ…？なぜ？

どうして…！？

私をかばったことがそんなにショックだったの？

私…私がいけないの？

蘭さん…！何とか言ってよお…！！！！

「毛利さんのご両親は？」

先生が工藤君に話しかける。

でも、私が答えた。

今の彼に、どんな声をかけたって彼の耳には届きはしない。  
たとえば私でも…蘭さんでない限り…

「今日、来るはずです…！」

「そうか…宮野…さん、ちょっと別室に来てください。」

「わかりました。」

蘭さんのことで、先生とよく話した。

「それで？蘭さんはどうなったの？」

「あなたも医者でしょう？わかるはずです。」

「いいから答えなさい！！蘭さんは…！どうなってしまっの…！」

「…記憶…喪失です…！」

「記憶…喪失…！」

心の中ではもしかしたらと思っていた…

でも…本当にそうとは思わなかった。

私は重い足で、工藤君を呼びに行った。

「工藤……」

工藤君と言おうとしたとき、工藤君は蘭さんを抱きしめていた。蘭さんは驚いたような顔つきで工藤君を見ていた。

見てはいけないうようなものを見てしまった。

「あ……あの……?」

「あら……やだ……工藤君?何を……」

「蘭……」

私の声が届いていない……

彼の耳には蘭さんの声しか届いていない……

「あ、あの……だから……私は誰なんですか?あなたはいったい誰なんですか?」

「……蘭……!本当に何も覚えていないの……か?」

「わかりません……」

「そ……か……」

工藤君は非常に残念そうに言う……。

「工藤君……よく聞いて……今からいうことはすごく傷つくかもしれないな

い…！」

「知ってる…蘭は…記憶喪失なんだから？」

「…そうよ…しかも…もしかしたら、もうこのまま記憶喪失のままになってしまいかも…知れないの…！」

「…！！！！！！！！」

私の言葉に工藤君は目を見開き、驚いた様子だった。

「蘭さんが元に戻る可能性は…11%…」

たった11%の確率…

いくら蘭さんだって…どうなるかわからない…！

「蘭さん…あなたの名前は毛利蘭と言って…」

「蘭…毛利蘭…」

「そう…空手を習っていたわ…。すごくカッコよくて、関東大会、東日本大会で高校二年の部に優勝したわ…！」

「東日本大会…優勝…？」

「そう…蘭さんはすごくうれしがっていたわ…」

「…本当？」

「ええ！」

「そう…」

どこか悲しげの蘭さん…そんな思い出をなくしてしまったことが…彼女を苦しめているのね…

「あなたに抱き着いた変態のこの人が、工藤新一…」

「工藤…新一…？」

ピクン

あ…蘭さんがかすかに揺れる…

「覚えがあるの!？」

「いいえ…でも…すごく暖かい感じがするの…でも…でも…何かさびしい。私…あなたの気持ちかわかる…」

「え…?何を言ってるの?」

「名前は…?」

「宮野…志保よ?」

「宮野さん…ちよつと…」

蘭さんに惹かれて、病院の隅で、蘭さんが話した。

「あなたは…その…工藤さんが好きなのね…」

「…」

「私、わかった。私は、記憶喪失になる前に、工藤さんが好きだったのね…でも…あなたたちがいたから、わたしはあきらめたのだと思うわ…それから…覚えが…」

そういつたとたん、蘭さんは倒れてしまった。

「蘭さん!!!」

私は急いで軽い彼女を抱いて病室へと連れて行った。

工藤君はもう、病室にはいなかった。

先生が蘭さんを見てくださっている。

私はその時、工藤君を探していた。不意に、夕日がきれいになる土手を見てみた。

そこには、私の愛しい彼がいた…。

「工藤君…」

私は静かに彼の横に座った。

彼はぼんやり空を見ていた…。そんな彼がかわいそうに思えた…

「工藤君…」

もう一度呼びかける…。

応答は…ない。

仕方ない…。

それなら…告白してしまおう…

これで…彼の傷を…癒してあげたい…

「工藤君、私、あなたのことが好きよ？」

「…？」

ピクン

私のほうを見る…。

「好き…あなたが好き…！この気持ちは…蘭さんより強いわ…ねえ…  
…工藤君…私と付き合って…そうしたら…蘭さんという傷から…抜  
け出せるわ…！」

「宮野…俺…！」

## 第四章（後書き）

どうこたえるか、新一君！！

## 第五章

「宮野…俺…

無理…だ…」

やっぱり…ね…

でも…やっぱり悲しいわ…。

本当に口から伝えられるのはね…

ねえ…最後だけ…最後だけ…

最後だけわがままいいかな…？

私はそつと…そつと彼にやさしく抱きついた…。

きつとあなたは驚いたことでしょう…でも…

最後のわがままだから…お願い…！

私を包んで…お願い…

「宮野…」

「お願い…っ！私を抱いて…！！私…の…最後の…最後のわがままだからあ…！！」

私は涙が止まらなかった。

そして…彼は優しく私を抱いてくれた…。

あたたかいあなたのむね…。

大好きだったあなたの胸…。

今でも…この先も…あなたを愛しています…

私は静かに離れると、「だいすき」と耳打ちしながら家に帰って行った。

蘭さん、ごめんなさいね…私、彼をもらっわ…。

あなたには…まげやしない！！

「蘭さん…私…」

誓うわ…あなたを超えて見せる…！  
あなたから…工藤君を取って見せる…

その時だった。私の考えに…何かが横ぎった…。

何…？なんだろう…！？

トゥルルルル  
トゥルルルル

私は急いで受話器を取った。

「はい、阿笠または宮野です。」

「俺だ、工藤。」

「あら…どうかした？」

私…胸が熱く…

「蘭の声が聞こえたんだ…」

「え…？」

「宮野と幸せになっってくれって…」

「…？ちよつと…それって…」

「もしかしたら…蘭は自分から記憶喪失になったんじゃないか？演技していない、本当にそう思ったから…蘭は自分を捨てたんじゃないか？」

「…そうよ…蘭さんは…あなたが好きだったのよ…！大好きだったから…」

「…俺も…好きさ…蘭のこと…愛してる…」  
「…！！！」

聞きたくない…！ききたくない！！

蘭さん…！蘭さんの…バカアアアアアアア

「あなたたち両想いだったのね…」

「ああ…そうみたいだな…」

うれしそうな声して…

蘭さん…私…あなたに悪いこと思ってたみたいね…。

蘭さん、確かに私は彼のこと好きよ？

でも…

私のもういいの。

蘭さん…あなたに譲るわ…。

私は…あなたたちを見守るわね…。

頑張っ…蘭さん…！

F a r e w e l l , m y f i r s t l o v e .  
S n i c h i d i d n o t l o v e .

## 第五章（後書き）

最後のは、新一、大好きでした。

さようなら、私の初恋。

です！

最後まで、新一と呼び捨てにさせたこと、新蘭ファン、ごめんなさい！

感想お待ちしています！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2121z/>

---

花開くとき

2011年12月10日21時02分発行